菅原道真「書斎記」と白居易「池上篇」との比較考察（その一）

――白居易「池上篇並序」試読――

焼山廣志

一

菅原道真の作品の中に散文として「書斎記」がある事はよく知られている。この作品は『本朝文粋』にも採られている著名なものである。この作品の有する価値については川口久雄氏や大曽根章介氏の論文に詳述されている。（注1）一方で当時の趣向であった中国の先行作品からの、特に『白氏文集』からのこの作品への投影関係については管見では前述の大曽根章介氏の論文の中で次のような内容の一文があるのが注目される。

『本朝文粋』に採られている五篇の記「富士山記」「書斎記」「亭子院賜飲記」「池亭記」（二部）は、内容から「富士山記」「亭子飲賜飲記」のグループと「書斎記」「池亭記」のグループに分けられるとされ、その後者の三篇の「記」は叙述の体裁において、白楽天の「江州司馬庁記」「草堂記」等の影響が見られると論じられている。（注2）

次に本稿で対象とする作品からは外れるがこの「書斎記」の後に著作された兼明親王の「池亭記」と慶滋保胤の「池亭記」は後の『方丈記』に影響を与えた先行作品としてつとに有名なものであるが、この二篇について若干触れてみる。金子彦二郎氏の著述の中に白居易の「池上篇幷序」との詳細な比較考察をなされた一文が挙げられる（注3）一方、堤留吉氏は著述の中で次のように述べられている。

「草堂記」「池上篇」の大きな影響を受けたといわれる兼明親王の「池亭記」、慶滋保胤の「池亭記」、鴨長明の「方丈記」などの骨組みのほぼ同一であるというのも、当然のことではあるまいか。また白楽天に私淑してその詩風を愛好

した慶滋保胤や鴨長明が、その表現に大きく影響を受けることも当然のことであろう。（中略）白楽天の住居・庭園・設備、その住居を中心とする四季の景観、ならびに生活の状態を題材とした一群の詩は「草堂記」において一応まとまり、さらに履道里宅について述べた一群の詩は「池上篇」において総結集され、ここに一つの優れた「池上篇」となったと考えてよかろう。「草堂記」は四十六歳の作、「池上篇」は五十八歳の作である。いま両篇の表現を概観するのに「草堂記」の方は非常に力んでものをいっている傾向が強く、語句の洗練にも大いに意を用いているため、いわゆる張りのある文章になり、したがって相当な長篇になっている。それに対し「池上篇」の方は老成とでもいうか、力まず、かしこまらず、さらりと流しているといった筆致が汲みとれる。かくて「池上篇」の方は散文（序）だけに止めず、（中略）一篇の詩を添えている。ここでは序と詩とが渾然一つになって文学的な効果を挙げている。（中略）「草堂記」も「池上篇」も、そこに「終老せんとす」とはいいながらも、「草堂記」では「出処行止以て自ら遂ぐるを得ば、則ち必ず左手に妻子を引き、右手に琴書を抱き、斯に終老し、以て我が平生の志を成就せん。」と条件付きなのに対し、「池上篇」では「皆吾れの好む所尽く我が前に在り。時に一杯を引き、或は一篇を吟ず。妻孥熙熙、雞犬閑閑たり。優なる哉、游なる哉。吾れ将に其の間に終老せんとす。」と、いわゆる外適内和、体寧心恬の境地に達したことを語っている。わが国の両「池亭記」や「方丈記」が「草堂記」「池上篇」を始め、これらに連なる一群の詩の影響関係をもちながらも、とりわけ「池上篇」との関係が深いのは、この辺に一つ原因があるように思われる。（注4）

引用が長くなったが白居易の一連の作品の中でとりわけ「池上篇」からの投影が濃厚であるという論述は傾聴すべき見解だと思う。

ここで菅原道真の「書斎記」に戻る。あくまでも私見の域を出ないがこの堤留吉氏の見解は兼明親王、慶滋保胤二者の「池亭記」に留まらず道真の「書斎記」にも同様の投影の指摘が出来るのではないかと考える。つまり白居易の「池上篇」の影響を受けた日本での作品はまず「書斎記」に指摘でき、その後、兼明親王の「池亭記」そして慶滋保胤の「池亭記」と続く流れがあるのではないかと推測する。この見解を実証する為にまず白居易の「池上篇」の作品考察が正確に求められる。手元にはこの作品全般にわたって注釈が試みられた書を見出し得ない。そこで今回は「池上篇并序」の注釈、

解釈を試みたしだいである。

尚、稿を改めてこの試読を踏まえてこの「池上篇」と道真の「書斎記」との比較考察を行ってみたいと思う。

「池上篇并序」の本文は朱金城氏著述の『白居易集箋校』（上海古籍出版社）に拠った。この書について太田次男氏は次のように述べられている。（注5）

近年、朱金城氏により大著『白居易集箋校』六巻が刊行され、全巻に亘って「箋」「校」の二欄が設けられ、研究者に便益が与えられている。但し、特に「校」欄の方法には宋刊本以来の本文に対する合理的処理方法が見られる。一見、不合理にみえようとも、旧鈔体はじめ複数のテキストの照合により、その理由が正されることもある。朱氏がわが旧鈔本を全く使用していないことも、その見解を狭めていることは間違いあるまい。

傾聴すべき論だが、今回対象としている「池上篇并序」に限ると、花房英樹氏の作品研究により（注6）旧鈔本にこの本文が載っているものはない事が判明する。「那波本」「宋本」「馬本」「汪本」の四本での校合が求められるのだが、朱金城氏によりこの四本の校合は『白居易箋校』でなされている。又この本文の内容に対して前述のように「箋」が付加されており、内容理解の上で参考にすべき貴重な説明、考察がなされている。本稿を草する中で引用した出典（特に『白氏文集』）の大半は、この書に拠った。以上が今回筆者が本文を朱金城氏の著作に拠った所以である。

以下、「池上篇并序」を便宜上五段落に分けて本文を訓読、語釈、通釈と説明考察を進めてみる。

二

池上篇并序

都城風土水木之勝、
在東南偏。
東南之勝、在履道里。
里之勝、在西北隅。
西閈北垣第一第。
卽白氏叟樂天退老之地。
地方十七畝
屋室三之一
水五之一、竹九之一。
而島樹橋道間之。
初樂天旣爲主

池上篇並（ならび）に序

都城の風土水木の勝は
東南の偏に在り。
東南の勝は、履道里に在り。
里の勝は、西北の隅に在り
西閈北垣第一の第は、
即ち白氏叟楽天退老の地なり。
地は方十七畝にして
屋は三が一
水は五が一、竹は九が一なり。
而して島樹橋道之（これ）に間（まじ）へたり
初め、楽天既に主となりて

喜且曰。雖有臺池[*1]
無粟不能守也。
乃作池東粟廩。
又曰。雖有子弟
無書不能訓也。
乃作池北書庫。
又曰。雖有賓朋。
無琴酒不能娛也。
乃作池西琴亭
加石樽焉。

喜びて、且つ曰はく、臺、池有りと雖も粟無くんば守ること能はじ乃って池東に粟廩を作る。又曰はく、子弟有りと雖も書無くんば訓ふること能はじ乃って池の北に書庫を作る又曰はく、賓朋有りと雖も琴酒無くんば娛しむこと能はじ乃って、池の西に琴亭を作りて石樽を加ふ

校異（『白居易集箋校』より引用。以下校異は同じ）

＊1 臺池…「臺」下宋本、馬本倶脱「池」字據那波本増、盧校作「池臺」

通釈

洛陽の街で景勝の地は東南のはずれにある。更に東南の景勝の地は履道里にある。その履道里の中での景勝の地は西北のはずれにあるのである。西に門があり北に垣根のある家がある。それがすなわち私が年老いて職を退いてから住んだ所である。

宅地は十七畝でそのうち家屋が三分の一、池が五分の一、竹林が九分の一である。これに島の樹木や橋や道も加わる。初め私はこの家の主となって喜んで次のように言った。土地があっても穀物がなければ生きて行く事は出来ない。そこで池の東に穀物を蓄える倉庫を作ったのである。またこうも言った。子弟がいても書物が無ければ教えることは出来ない。そこで池の北に書庫を作ったのである。またこうも言った。客や友人がやって来ても琴や酒がなければ楽しむ事が出来ない。そこで池の西に琴を弾く部屋を作り、たくさんの酒の樽を用意したのである。

語釈

○都城　天子または諸侯の都。ここでは洛陽のこと。○風土　気候と土地の有り様。○水木　園林・池沼の景色　○勝　すぐれた所　○偏　中央から離れた。田舎の、○履道里　洛陽の里巷の名。唐の白居易の居たところ。『旧唐書』巻一一六白居易傳に「居易罷杭州歸雒陽于履道里得故散騎常侍楊憑宅、竹林池館、有林泉之致」とある。『唐書』巻一一九白居易傳に「東都所居履道里疏沼種樹構石樓香山」とある。『白氏文集』に「2379履道新居二十韻」「2563履道春居」「2725歸履道宅」「2793答王尚問履道池舊橋」「2885履道池上作」「2904履道居一」「2905履道

居二」「2906履道居三」「3502履道西門一」「3503履道西門」等がある。（『白居易集箋校』箋注より引用。作品番号は『白氏文集の批判的研究』綜合作品表の作品番号に倣う。以下同じ）○畝　せ。耕地の面積の単位。古は六尺四方を歩、歩百を畝とし、秦以後は二百四十歩を畝とす。○島樹　島の樹木〔朱慶餘、昆明池泛舟詩〕島樹偶知レ名　○橋道　橋梁と道路〔白居易、與微之書〕白石爲二橋道一流水周二于舍下一　○西閤北垣　村里の西北の垣門。○粟廩　くらにある米。官の米倉の米。○賓朋　訪問者。まろうど。来賓。賓客

樂天罷杭刺史時
得天竺石一
華亭鶴二以歸
始作西平橋
開環池路
罷蘇州刺史時
得太湖石*1
白蓮、折腰菱、青板舫
以歸。又作中高橋。
通三島逕。
罷刑部侍郎時。

樂天杭州の刺史を罷めし時
天竺の石一つ
華亭の鶴二つを得て以て帰る
始めて西に平橋を作り
池を環る路を開く
蘇州の刺史を罷めし時
太湖石
白蓮、折腰菱、青板舫を得て
以て帰る。又中に高橋を作りて
三島の逕（みち）を通ず
刑部侍郎を罷めし時

有粟千斛、書一車。
泊藏獲之習筦磬絃歌者
指百以歸

粟千斛、書一車有り
泊（*1）び臧獲の筦磬絃歌を習ふ者
百を指して以て帰る。

校異

*1　太湖石　盧校（清盧文弨羣書拾補校本）
謂「石」下各本脱「五」字

通釈

私が杭州の刺史を止めた時に天竺山からとれる石を一つと、華亭の鶴二羽を手に入れて持ち帰った。それから西に平橋を作り、池のまわりに道をめぐらした。

私が蘇州の刺史を止めた時は太湖産の石、白蓮、折腰菱、青板舫を手に入れて持ち帰った。また中央に高橋を作って三島と道が通じた。

私が刑部侍郎を止めた時、穀物千斛と書物が車一台分あった。また下僕の中で管弦の嗜みのある者、百人ほどを指図して連れて帰って来た。

語釈

○樂天罷杭州刺史時　長慶二（八二二）年白居易五十一歳時、

七月十四日に杭州刺史に除せらる。十月一日に至る。長慶四（八二四）年、五月太子左庶子に任ぜられ、月末杭州を去り、汴河路にて、秋、洛陽に至り、履道里の故楊憑の舊宅を田氏から讓り受く。白居易五十三歳時。（花房英樹著『白氏文集の批判的研究』附録「白居易年表」に拠る。以下同じ）○天竺　山名。浙江省杭縣の霊隠山飛來峯の南、上・中・下の三竺に分る。〔白居易、答客問杭州詩〕山名天竺堆青苔、湖號錢塘瀉綠油〔白居易、洛下居詩〕三年典郡歸、所得非金帛。天竺石兩片、華亭鶴一隻。○華亭鶴　この語の意は華亭産の鶴の事だが、次の故事を響かせる。【華亭鶴唳】晉の陸機がまさに殺されようとした時、華亭で鶴の声を聴いて楽しんだ事を思い出して歎いた語。〔晉書、陸機傳〕成都王穎起兵討長沙王乂、假機後將軍河北大都督、機以覇旅入宦、頓居羣士之右、皆有怨心、譖之於穎、穎怒使人收機、機歎曰、華亭鶴唳豈可復聞乎、遂遇害

○平橋　たいらかな橋〔温庭筠　春州曲〕門外平橋連柳堤、歸來晩樹黄鶯啼。　○罷蘇州刺史時　宝暦一（八二五）年三月四日蘇州刺史となり二十九日出で、汴州の令孤楚に過り、五月五日に至る。宝暦二（八二六）年、白居易五十五歳、春、眼を病み、さらに落馬して傷つく。夏末百日の休暇を請う。九月中旬、任を解かれる。　○太湖石　峯・溪・洞などの形をした石。盆景、庭石等に用いる。中国の太湖から出るからいう。〔五雜組、地部〕洞庭出太湖石黒質白理、高逾尋丈峯巒窟穴、賸有天然之致　『白氏文集』に「2282太湖石」「2523太湖石」等がある。　○白蓮　白い蓮の花。『白氏文集』「2526問江南物」に「引手摩挲青石笋、廻頭點檢白蓮花」とあり、又「2549種白蓮」に「呉中白藕洛中栽、莫戀江南花懶開」等とある。　○青板舫　蘇州舫の事か。『白氏文集』「2526問江南物」に「蘇州舫故龍頭闊、王尹橋傾齒斜」とあり「3428感蘇州舊舫」に「守得蘇州船舫爛、此身爭合不衰殘」等とある。　○罷刑部侍郎時　太和二（八二八）年、白居易五十七歳、春（洛陽より）長安に帰る。二月十九日、刑部侍郎に除せられ晉陽縣男に封ぜらる。冬、眼と肺を病みて百日の休暇を請う。太和三（八二九）年、三月中旬、太子賓客分司となる。　○斛　容量の単位。十斗。　○洎　およぶ（及）。いたる（至）　○臧獲　男の召使人。女の召使。しもべ。奴婢。〔荀子、王霸〕雖藏獲不肯與天子易執業〈注〉藏獲、奴婢也。　○筦磬　管磬。笛と磬（中国古代の楽器の一つ。石や玉でつくった「へ」の字形の打楽器で台につるして打ち鳴らす）〔唐書　楽志〕楽和管磬礼備蒸嘗　○絃歌　琴瑟（弦楽器）に合わせて歌う絃歌。〔論語　陽貨〕子之

二武城一間二弦歌之聲一　〈集注〉弦、琴瑟也。

先是潁[*1]川陳山與釀法
酒味甚佳
博陵崔晦叔與琴
韻甚清
蜀客姜發授秋思
聲甚淡
弘農楊貞一與青石三
方長平滑　可以坐臥
大和[*2]三年夏
樂天始得請爲太子賓客
分秩於洛下
息躬於池上
凡三任所得　四人所與
洎吾不才身
今率爲池中物矣

是より先潁川の陳孝山釀法を与ふ。
酒の味甚だ佳し
博陵の崔晦叔　琴を与ふ
韻甚だ清し。
蜀客姜発秋思を授けて
声甚だ淡し
弘農の楊貞一青石三を与ふ
方長平滑にして以て坐臥すべし
大和三年の夏
楽天始めて、請ひて太子賓客と爲る事を得
秩を洛下に分ち
躬を池上に息む
凡て三任得たる所、四人の与へし所
洎び吾が不才の身
今率ね池中の物と為る。

校異

＊1　潁川　「潁」、各本倶誤作「穎」、今改正
＊2　大和　馬本訛作「太」　據宋本、那波本本改正

通釈

かって潁川の陳孝山が私に醸造方法を教えてくれた。その酒の味ははなはだ美味である。又、博陵の崔晦叔が私に琴をくれた。その琴の音色ははなはだ清くすみきっている。又蜀客の姜発が私に秋思の曲を教授してくれた。その曲調ははなはだ淡々としている。又、弘農の楊貞一が私に青石を三つくれた。それは長方形を成しており石の表面は平らかで滑らかである。だからその石に坐ったり横になったりすることが出来るのである。

大和三年（八二九年）夏、私は願い叶って太子賓客分司になることが出来、俸給を洛陽の地で授かることになり、我が身は履道里にある我が家の池上で憩うことが出来ているのである。

今思うに、杭州刺史、蘇州刺史、刑部侍郎の三つの職歴を経て来たこと、又、酒、琴、曲、青石を四人の友人より私に授けられたこと、そして才能のない我が身、これら全てが今池中に老い朽ちてしまいつゝあり、日の目を見ることはなさそうである。

語釈

○潁川　川の名。源は河南省登封縣の西境の潁谷。淮水に注ぐ。潁水に同じ。ここでは前述の「華亭」と同様、次の故事を響かせていると思われる。【潁水隠士】堯の時、潁水の辺に居た隠士許由をいう。〔高士傳〕許由耕二于潁水之陽一堯召爲二九州長一由不レ欲レ聞レ之、洗二耳於潁水濱一時巣父索レ犢欲レ飲レ之。見二由洗レ耳曰汚二吾犢口一索二犢上流一飲レ之。○陳孝山　陳岾の事。『白氏文集』「2732偶吟」に「元氏詩三帙、陳家酒一瓶」とある。朱金城氏は「箋」で「陳家酒一瓶」を「陳孝山岾の釀ずる所の酒を指す」と説明されている。（『白居易集集箋校三』一八八七頁）又「2673詠家醞十韻」に「舊法依稀傳レ自レ杜　杜康、新方要妙得二於陳一　陳郎中岾傳二受此法一」とある。

○釀法　発酵させて酒を造る方法。　○博陵　地名。隋に置く。今の河北省定縣治　○崔晦叔　崔玄亮の事。唐昭義の人。字は晦叔。進士。官は元和の初、駕部員外郎大和中、諫議大夫。文宗の時直諫を以て著聞し、甚だ宿望あり。虢州刺史に終る。『旧唐書』巻一六五、『唐書』巻一六四に伝がある。　○秋思　曲名。『白氏文集』「2271和嘗新酒」に「擧レ臂一欠伸、引レ琴彈二秋思一」とある。　○弘農　地名。漢に置く。今の河南省洛陽・嵩・内郷等の縣の以西、陝西省商縣以東の間の地。治は弘農縣。　○楊貞一　楊歸厚の事。『白氏文集』「0528初到忠州東樓。寄萬州楊八使君」と題する詩が存し、朱金城氏は「楊八使君」の説明として「萬州刺史の楊歸厚なり。花房英樹著『白氏文集の批判的研究』中の「楊萬州」及び「楊使君」を「楊虞卿」としているのは均しく誤れり。白氏元和十三年十二月二十日を以て江州司馬より忠州刺史を授けらる。元和十五年夏召されて司門員外郎と爲る。此の時期内、楊萬州と酬和する詩、甚だ夥し。「題郡中荔枝詩十八韻兼寄萬州楊八使君（巻十八）」「和萬州楊使君四絶句（巻十八）」「送高侍御使廻因寄楊八（巻十八）」「答楊使君登樓見憶（巻十八）」「寄胡餅與楊萬州（巻十八）」「寄題楊萬州四望樓（巻十八）」等のごとき詩中の「楊八」「楊使君」「楊萬州」は均しく歸厚を指せり。而して楊虞卿に非ず」と述べられている。（『白居易集箋校二』五八二頁）　○青石　青色の石。『白氏文集』「0147新樂府　青石」に「青石出レ自二藍田山一兼車運載來二長安一」とある。　○坐臥　おきふし。坐ったり寝たりすること。　○爲太子賓客　大和三（八二九）年白居易五十八歳、三月中旬、太子賓客分司となり、裴度等に興化里の等に送られ、四月初め、洛陽に至り、履道里に居る。（「白居易年表」より。前出）　○率　おおむね。すべて。大概。　○池中物　字句通り詩題の「池上篇」の縁語的表現で、〈池の中に沈んでしまう物〉の意だと思うが、この語感に次の故事を響かせているのではないかと考える。【非池中物】龍は池中に老い

朽ちてしまうものではない。英雄は久しく屈するものではなく、時を得れば勢に乗じて必ず為すことあるの喩〔呉志、周瑜傳〕恐蛟龍得二雲雨一、終非二池中物一也

毎至池風春　池月秋
水香蓮開之旦
露清鶴唳[*1]之夕
拂楊石　擧陳酒
援崔琴　彈姜秋思
頹然自適　不知其他
酒酣琴罷
又命樂童登中島亭
合奏霓裳
散序聲隨風飄
或凝或散
悠楊於竹烟波月之際者
久之曲未竟而樂天陶
然已醉睡於石上矣。
睡起偶詠　非詩非賦
阿龜握筆　因題石間
視其粗成韻章
命爲池上篇云爾

池風の春　池月の秋
水香しく蓮開ける旦
露清く鶴唳く夕に至る毎に
楊石を払い　陳酒を挙ぐ
崔琴を援きて　姜が秋思を弾くに
頹然として自適し其の他を知らず
酒酣はにして琴罷むときに
又樂童に命じて　中島亭に登りて
霓裳を奏せしむ。
散序の声風に随ひて　飄り
或ひは凝り、或ひは散ず
竹烟波月の際に悠揚たる者なり。
久しくして曲未だ竟らずして楽天
陶然として已に石の上に睡る
睡起きて偶詠す。詩に非ず、賦に非ず
阿亀　筆を握りて因りて石間に題す
其の粗韻章を成すを視る
命じて池上篇と為す。爾云ふ

校異

＊1鶴唳　「唳」馬本訛作「涙」、據宋本、那波本、盧校改正

通釈

春風が池面にそよぐ頃、秋の名月が池面に映る頃、水蓮が開花しその香りが池上に漂う早朝に、又、露が降り始め、凄鋭で清らかな鶴の鳴き声が響きわたる夕刻に、楊貞一からもらった青石のちりを払い、陳孝山伝授の酒杯を挙げ、崔晦叔からもらった琴を手にし、姜発伝授の秋思を奏で始めるとすっかり酔いが回って来て自己陶酔してしまい他の事は何もわからなくなってしまう。

酒の適量をこえ、琴をひく気分が失せてくるとかわりに楽童を呼び、中島の亭に登らせて霓裳を奏でさせる。その奏楽の音色は折から吹いてくる風の流れに乗り、ひるがえり、私の耳にはそれがある時は共鳴し、ある時は拡散して聞こえてくる。それが竹林に霞がたちこめる春の候や名月が池上に映っている秋の候ならば殊更、その音色が高下して遠くから響きわたって聞こえてくるのである。

曲がまだ終わっていないのに私はすっかり心地良く酔っぱらってしまっていつの間にか石の上で眠りについてしまった。

ふと目が醒めて思いつきのままある思いを口にする。それは詩とは言えないし、賦と言えるようなものでもない。甥の阿亀を呼んで筆を握らせ石の所でこれを書き取らせる。

かろうじて韻文らしきものが形となる。それを名づけて「池上篇」とすることにしよう。その内容は以下の通りである。

語釈

○池風　池の面を吹く風。『白氏文集』「2285葺池上舊亭」に「池月夜凄涼。池風曉蕭颯」とある。　○鶴唳　鶴が鳴く。又鶴の鳴き声。鶴の鳴き声が凄鋭で清らかなこと。〔論衡、變動〕夜及レ半而鶴唳、晨將レ旦而鷄鳴。　○頽然　酒に酔って体のくずれる様。〔柳宗元、始得西山宴游記〕引レ觴滿レ酌、頽然就レ醉　○自適　自分の心にかなう。我が思うままに暮らす。自ら心をやる。自ら心を慰める。〔江淹、擬陶潛詩〕濁酒聊自適　○樂童　子供の音楽家　○霓裳【霓裳羽衣曲】唐の楽曲の名。もと婆羅門の曲。西涼から伝わる。唐の河西節度使楊敬述、之を献じ玄宗が其の詞を潤色したもの。一説に玄宗が道士羅公遠に伴われて月宮に入り聞く所の楽を写したものという。〔唐書　禮樂志〕河西節度使楊敬述獻二霓裳羽衣曲一唐書　禮樂志〕河西節度使楊敬述獻二霓裳羽衣曲十二遍一　○散序　散ったりまとまったりする。

○悠揚　声音が高下して遠くから来るさま。〔温庭筠、春愁曲〕蜂喧蟬駐俱悠揚、柳拂二赤欄一纖草長　○陶然　心持ち良く酒などに酔う様。酔って感興を催す様。愉快の情の動き生ずる様。〔陶潛、時運詩〕揮二茲一觴一陶然自樂。　○阿龜　白居易の弟行簡の子。白行簡は宝暦二（八二六）年白居易五十五歳の時、冬亡くなる。〔「白居易年表」より。前出〕故に甥の阿亀を引き取り養育する。この阿亀を詠んだものに『白氏文集』「1316路上寄銀匙與阿龜」に「緣下留二龜子一住上、涕淚一闌干」とあり「312弄龜羅」に「有レ姪始六歲、字之爲二阿龜一」とある。又「1033聞龜兒詠詩」に「憐渠已解詠詩章、搖レ膝支レ頤學二二郎一」等とある。　○韻章　韻のある文章。

〔平水韻〕

●●○●
十畝之宅
●●○○
五畝之園（上平声一三元）
●●●○
有水一池
●●○◎
有竹千竿（上平声一四寒）

●●●●
勿謂土狹
●●●◎
勿謂地偏（下平声一先）

㊀

十畝の宅
五畝の園
水一池有り
竹千竿有り

謂ふこと勿れ　土狹しと
謂ふこと勿れ　地偏なりと

●●○●　足以容膝
●●●◎　足以息肩（下平声一先）
●○●○　有堂有亭
●○●◎　有橋有船（下平声一先）
○●○●　有書有酒
●○●◎　有歌有絃（下平声一先）
●●●○　有叟在中
●○○◎　白鬚飄然（下平声一先）
●●○●　識分知足
●○○◎　外無求焉（下平声一先）

㊁

以て膝を容るるに足り
以て肩を息むるに足れり
堂有り、亭有り。
橋有り、船有り。
書有り、酒有り。
歌有り、絃有り。
叟有りて　中に在り。
白鬚飄然たり
分を識り足ることを知れり。
外に求むること無し。

○●●●　如鳥擇木
○●○◎　姑務巣安（上平声一寒）
○●○●　如鼉居坎
●○●◎　不知海寛（上平声一寒）

㊂

鳥の木を択びて
姑らく巣の安きを務るがごとし。
鼉の坎に居て
海の寛きを知らざるがごとし。

○●●●　靈鶴怪石
●○●◎　紫菱白蓮（下平声一先）
○○●●　皆吾所好
●●●◎　盡在我前（下平声一先）
○●●○　時引一盃
●○●◎　或吟一篇（下平声一先）
○○○○　妻孥熙熙
○●○○　鷄犬閑閑（上平声一五刪）

㊃

優哉　游哉
吾將終老乎其間

霊鶴　怪石
紫菱　白蓮
皆吾が好む所にして
尽くに我が前に在り。
時に一を引き
或は一篇を吟ず
妻孥　熙熙として
鷄犬　閑閑たり。
優なるかな。游なるかな
吾将に老を其の間に終へんとす

※「○」は平韻、「●」は仄韻、「◎」は平声の押韻　「（」は対句を示す。

校異

＊1有亭　「有」馬本作「一」非。據宋本、那波本、盧校
　　校正
＊2有船　「有」馬本作「一」非。據宋本、那波本、盧校
　　改正

＊3如黿　「黿」馬本訛作「龜」（中略）今據宋本、那波本、盧校改正

通釈

㈠十畝の宅地　五畝の庭園、そして一つの池が有り、千竿の竹林がある。

㈡この土地が狭いとか、この土地が外れにあるとか気にする必要はない。膝を入れることが出来る空間があればそれで十分だし、肩の入る位の空間があれば満足とすべきである。（起居できる空間があれば十分である。）私の自宅には堂が有る。庭がある。橋が有り、船も有る。書庫も有り、酒も有る。楽曲も用意され、それを奏でる楽器もある。

老人が居てこの宅地で生活している。白いひげをたくわえ、俗事にこだわらず悠然と生きている。自分の分をわきまえ、足りることを知っており、それ以外に欲を出そうとしない。

㈢それはあたかも鳥が住み心地の良い木を選んでそれに満足し他に大きな森があることも知らずその木の上に巣を構えて生きているようなものだし、又、蛙が井戸の中に住みつき大海の寛さを知らないまま、日々を重ねているような生活である。

㈣りっぱな鶴、珍しい石、紫菱や白蓮が池上に浮かんでいる。これらの物は私の好むものばかりであり、それが全て私の眼前にある。そうした中で一杯の酒を手にし又、一篇を吟ずる時、妻子はこの宅でゆったりと満足してくつろいでいるし、鶏や犬はこの宅地をのんびりと気ままに往き来している。ああ、なんとすばらしいことか。私はまさに老境の身をこうした満ち足りた中で終えようとしているのである。

語釈

○竿　竹さお　○白鬚（はくしゅ）　白いひげ。老人。〔元稹　西歸詩〕寒窗（そう）風雪擁二深爐一、彼此相傷指二白鬚一

○飄然（ひょうぜん）　ぶらりと来たり去ったりするさま。又利慾の心を全く捨て去るさま。俗事にこだわらないさま。〔杜甫　春日憶李白詩〕白也詩無レ敵、飄然思不レ群　○知足　足りることを知る。身のほどをわきまえて欲ばらない事。〔老子　三十三〕自勝者強、知レ足者富　〔老子　四十四〕知レ足不レ辱、知レ止不レ殆　○擇木　臣下が仕えるべき君主を選ぶのに喩える。木を選ぶ。〔左傳　哀二〕鳥則擇レ木木豈能擇レ鳥〈左傳補釋〉服虔注、鳥喩レ己木以喩二所レ之之國一　○姑　しばら

く（且）一時。とりあえず。　○務　つとめる（精力をひたすらその事に用いる）。励む。　○巣　【巣居】鳥のように木の上に家を構えて住む。〔荘子　盗跖〕古者禽獸多而人民少、于レ是民皆巣居以避レ之　【巣居子】堯の時の隠人巣父。常に山居して世利を営まず年老いて樹上に巣を作って寝たという。〔王康琚　反招隠詩〕昔在太平時、亦有二巣居子一〈注〉善曰、皇甫謐逸士傳曰、巣父、堯時隠人、常山居不レ営二世利一年老以レ樹爲レ巣、而寢二其上一故時人號曰二巣父一【巣父】堯時代の隠人。山居して世利を営まず年老い樹上に巣を作って其の上に寝た。故に巣父という。堯嘗て許由を天に薦めんとするや許由はこれを聞いて耳の汚れなりといって、潁川に耳を洗ったが、巣父は許由の耳を洗った水を汚れたといって渡らなかったと伝える。前述語釈「潁川（えいせん）」の項参照の事。

考察――如鳥擇木　姑務巣安について――

前述の本文の所でも指摘しているが「如鳥擇木、姑務巣安」は次の「如鼃居坎、不知海寛」と隔句対をなしている表現箇所である。「如鼃居坎、不知海寛」は後に詳述するが『荘子』「秋水」篇の内容を出典としている。一方その隔対句をなす「如鳥擇木、姑務巣安」の内容に前述の堯時代の隠者巣父の故事を響かせているのは理解出来るにしても、後者の『荘子』「秋水」を出典とする内容と対をなしているものとは考え難い。ここでは別の出典を考察してみる必要がある。

『荘子』「逍遥遊」篇の次の一文に注目したい。〔荘子　逍遥遊〕其名爲レ鵬。背若二泰山一、翼二若垂天之雲一、博二扶徭一羊角而上者九萬里、絶二雲氣一負二青天一、然後圖レ南、且レ敵二南冥一也。斥鷃笑レ之曰、彼且二奚適一也。我騰躍而上、不レ過二數仞一而下、翺二翔蓬蒿之間一。此亦飛之至也。而彼且二奚適一也。此小大之辨也。

この一文の内容は鵬という名の大鳥がいて羽ばたくと九万里の高度にいたり南冥に向かっていた。それを見た小鳥のみそさざいがその鵬の事を我が身に照らして笑ったという話から、小人は自らの小知に拘束され大人の抱く壮大なものが理解出来ない事の喩になっている。この内容を踏まえて、白居易が「如鳥擇木、姑務巣安」を自分の今の生活を謙遜して鵬の志を理解出来ない斥鷃のような小知しか持ち得ないままで自己満足して生きていることを表現しているものと考えれば後者の「鼃」のような「海の寛さを知らない」ままで生活しているという表現内容と上手く対をなしていると思われる。この事を裏付けるものとして、慶滋保胤の「池亭記」の中に

次の一文がある事を見逃してはならないと思う。

鷃住二小枝一、不レ望二鄧林之大一

蛙在二曲井一　不知二滄海之寛一　（「池亭記」）

（鷃は小枝に住みて鄧林の大きなるを望まず蛙は曲井に在りて滄海の寛きことを知らず）

この一文は今回試読している「池上篇」からの投影の顕著な表現として先学より指摘のなされている箇所である。（注7）この慶滋保胤の表現は白居易の「池上篇」の内容に『荘子』の典故があることを見抜いて援用したことを物語っている。しかも白居易の表現より一層直接的に『荘子』の典故を踏まえたものになっていると思われる。

○龜　かえる。井蛙　坎。【坎井之蛙】井戸の底のかえる。見聞の狭い喩。坎井はくずれた井戸。一説に浅い井戸。

○龜居坎不知海寛　【井蛙不可以語於海】井戸の中の蛙とは海の話は出来ない。見聞の狭い人には広大な真理を語ってもわからない喩。

『荘子』「秋水」篇に

北海若曰、井龜不可以語於海者拘於虚也。夏蟲不可以語於氷者篤於時也。曲士不可以語於道者束於教也。

（北海若曰く、井龜は以て海を語るべからざるは虚に拘れば なり。夏蟲は以て氷を語るべからざる時に篤ければなり。曲士は以て道を語るべからざるは教へに束ねらるればなり）

とあるに拠る。

○怪石　常と変わった形をした石。玉に似た石、〔山海經、中山經〕多二怪石一〈注〉怪石似レ玉也。　○妻孥　妻と子。家人。家族。眷族。妻帑に同じ。　『詩経』「小雅常棣」に

宜爾室家　樂爾妻帑　爾の室家に宜しく　爾の妻帑を楽しむ

是究是圖　亶其然乎　是れ究め是れ圖るに亶に其れ然るか

とあるに拠る語。　「毛傳」「集傳」に「帑は子なり」と注する。　○熙熙　やわらぎ楽しむさま。〔荀子、儒效〕熙熙兮其樂二人之藏一也〈注〉熙熙、和樂之貌　○鷄犬　にわとりと犬、この語に陶潜の『桃花源記』の「阡陌交交、鷄犬相聞」の内容を響かせている。

○閑閑　男女別なく相まじって往来するさま。のびやかに往来する様。『詩経』「魏風　十畝之間」に

十畝之間兮　桑者閑閑兮

（十畝の間　桑者閑閑たり）

「毛傳」に「閑閑然、男女無レ別往來之貌」と注があり、「集傳」に「閑閑然、往來者自得之貌」と注がある一文を典拠とした語。

○游　遊び楽しむ。心にかなう。自適。

注1　川口久雄著『平安朝日本漢文学史の研究』上、二一五頁～二一六頁及び日本古典文学大系『菅原文草・菅原後集』五三六頁
大曾根章介著『王朝漢文学論攷―『本朝文粋』の研究―』　七「書斎記」雑考

注2　『王朝漢文論攷』七「書斎記」雑考　一八一頁

注3　金子彦二郎著『平安時代文学と白氏文集―句題和歌・千載佳句研究篇―』　第一章　第三節　外来文化に対する日本化的創造精神の時間的・沿革的考察　一八頁～四三頁

注4　堤留吉著『白楽天研究』　第十章閑適詩その他　二七五頁～二七八頁

注5　『白居易研究講座第五巻　白詩受容を繞る諸問題』「白氏文集の受容並びにその研究史の概要」二三頁

注6　英房英樹著『白氏文集の批判的研究』「2綜合作品表」六三八頁

注7　○柿村重松著『本朝文粋注釈』下　慶保胤「池亭記」七〇二頁～七〇四頁
○大曽根章介著『王朝漢文学論攷』　九「池亭記」論二四三頁

○新日本古典文学大系『本朝文粋』後藤昭雄氏脚注「池亭記」九一頁

平成七年九月十八日執筆了

焼山　廣志
（大学院第七回修了・有明高専）